

渡谷利香・小川政弘作 「家出」

武田涼子 あ～あ、今日、帰るの憂うつだなあ。

保夫 なんで憂うつなの？

涼子 ヤバいことにさ、この前のテストで赤点2つも取っちゃったのよ。ほかのでも、赤点スレスレってというのが2、3あるんだ。それで親が呼び出されたのよ。

保夫 それはちょっとヤバいねえ。

涼子 今ごろ、カンカンだろうなあ。家帰りたくないなあ。

保夫 あきらめて帰りなよ。今ここで嫌がっても、結局帰らないわけにはいかないだろう？

涼子 うん。

ナレーション 彼女は、重い足取りで家路をたどりました。歩きながら、いろんなことを考えていました。

涼子(モノローグ) どうしようかなあ。まっすぐ帰ろうかなあ。最近、勉強するの、なんとなくかかったくて。ますます難しくなったからなあ。だれか友達の家、寄ってって、遅く帰ろうか。そんなことしたら、もっとこっぴどく叱られるかなあ。…うん、本当は、叱られるのを怖がってるんじゃないんだ。もっとイヤなこと、そう、またわたしの成績のことで、叱り出すと、うちのお父さんとお母さんは、お互いのしつけの悪さの言い争いになって、しまいには、手が付けられなくなるほど、いがみ合うのよ。それがもっとイヤ。ああ、本当に帰りたくない。

ナレーション 実際、彼女の両親は、本当に不仲でした。いつのころからか、お互いの欠点をつつき合い、お互いの心を傷つけ合うようになっていたのです。そのことを考えると、彼女の足取りは一層重くなるのでした。

効果音 (ドアの開く音)

涼子 ただいま。

母 涼子、話があるから、ちょっといらっしやい。

涼子(モノローグ) ほら来た！

母 学校行ってきたわよ。相当ひどい成績を取ったそうね。しかも、素行まで悪いって。あなた、学校でタバコ吸ってたんですって？

涼子 え?! (モノローグ)なんでバレたんだろう？ ウソ！

母 生徒のだれかが、「屋上でタバコを吸ってる人が5、6人いる」って報告しに来て、行ってみたら、あなたがその中にいたって。

涼子 ……。

父 何か言ったらどうだ？ お前、一体学校へ何しに行ってるんだ？ 勉強しに行ってるのか、遊びに行ってるのか？

涼子 ……。

父 何か答えなさい。

涼子 勉強しに行ってます。

父 勉強しに行って、こんな成績を取るのか。大した勉強だな。どうなんだ？ 何か言ってみろ。

涼子 ……。

父 全く立派なもんだ。(母に)大体こんなことになったのも、お前のしつけがだらしないからだ。(涼子に)女のくせに、タバコだと？ (母に)一体お前は、一日中家にいて、何をやってん

だ。

母 わたしのせいだけだなんて。自分だって「仕事仕事」って言って、結局、この子の教育を逃げてるんじゃないですか。そうしとけば、わたしにあとで責任を全部押し付けられますものね。

父 うるさい。昔から、子供の面倒は母親が見ることに決まってるんだ。

母 まあ、ずいぶん石頭ね。子供のしつけは、夫婦ですものよ。民法でそうなってるんですから。ひと昔前の話、しないで。

父 うるさい！

涼子 もういい加減にしてよ。やめてよ。

母 あなたは黙ってなさい。

効果音 (口々にいがみ合う声(FO))

ナレーション 涼子の思ったとおりにになりました。彼女の両親は、まだいがみ合っています。彼女は、そっと居間を抜け出し、自分の部屋に行きました。

涼子(モノローグ) わたしがみんな悪いのよ。わたしが、もう少しいい子なら、お父さんもお母さんもケンカしないでいいのに。でも、なんであんなに争うのかしら？ なぜあんな風に憎み合うの？ わたしの幸せを思って注意してくれるのはありがたいけど、本当に思ってるなら、ケンカなんかしないでほしいのに。もっとわたしのことを聞いてほしいのに…。結局、わたしが注意されるようなことをしなきゃいいのよ。いい子になってりゃいいのよ。だけど、成績だって下げたくて下げたんじゃないわ。タバコだって、友達がみんな吸い始めたから、つい…。

わたしって、なんて主体性がないんだろう。そう、高校だって、みんなが行くから行ったんだわ。わたし、なんのために勉強してんのかしら？ もう学校なんか大嫌い。もう家なんか大嫌い。こんな争いしかない家、どっかへ行ってしまいたい。

ナレーション 一番相談相手になってほしい両親が、互いにいがみ合っているのを見るのは、とてもつらくて悲しいことでした。それに、涼子は一人っ子です。心細さもひとしおでした。こんな時、心から相談できる人がいたら、と思うのでした。

次の日、学校で――。

保夫 どうしたの、涼子？ 元気ないじゃん。

涼子 ちよつとね。

保夫 なんか訳ありっぽいじゃん。

涼子 もう家にいるのがイヤなの。学校も嫌い。どっかへ行っちゃいたいの。

保夫 何言うかと思ったら。そう言えば、昨日、お前の親、呼び出されたんだろ？ その辺からこじれたのか？

涼子 そうなの。

ナレーション 涼子は、話の一部始終を保夫に話しました。

保夫 ふーん。お前、思い切って家出しちゃいなよ。そして、お前の親にうんと反省させてやる機会つくってやんだよ。気持ちが落ち着くまで学校も休んでさ。

涼子 でも行く当てないもん。

保夫 おれに任せとけよ。おれの友達で、大学生のいいんだけど、その人のアパートに潜り込みなよ。ね？

ナレーション こうして彼女は、その夜、家出をしました。1日目、2日目、3日目、だれも彼女を見つけるこ

とはできませんでした。一緒にいさせてもらっている女子大生は、毎晩、くるくる遊ぶのに忙しくて、遅くにしか帰ってきません。彼女は、ほとんど独りで、部屋の中で毎日を過ごしていました。1週間ぐらいたって――。

涼子(モノローグ) まだみんな心配して捜しているかしら？ それとも、“あんな不良娘、どうとでもなれ”と思ってるのかしら？ ああ、お母さん、わたし、お母さん好きよ。でも毎日、ケンカしているのを見るのは、とつてもつらかったの。もうあんな悲しい思いしたくないもの…。でも、寂しいな。帰りたいな。けど、家に帰っても、もし前と変わらなかつたら…。ううん、ダメ、ダメよ！

ナレーション 夕方、涼子は、おなかがすいているので、外に買い物に行きました。その時――。

涼子 あ！

須山吉美 まあ、武田さん。どうしてたの、今まで？

ナレーション それは、クラスの友人、須山吉美でした。

吉美 ほんとにみんな心配してたのよ。ちょっとそこの公園にでも行きましょ。

涼子 ねえ、お願いだから、わたしと会ったこと、口外しないで。

吉美 わたしは構わないけど。でも、家出してから、毎日どうしてるの？ ねえ、毎日、楽しい？ そんなことないでしょ。帰ったほうがいいわ。ご両親、きっと心配してるわよ。

涼子 ふん。きっとまた、わたしの家出のことでケンカしてるね。

吉美 そんなことないと思うわ。子供がいなくなった家ほど、悲しいことはないわ。羊飼いが羊を迷子にってしまったみたいに。

涼子 羊飼いが…、羊を？ なんか、昔、日曜学校かなんかで聞いたようなこと言うわね。

吉美 そう、わたし、クリスチャンなの。ねえ、やっぱりあなたがいないってことは、お父さんもお母さんも悲しいと思ってるわよ。連絡もしないままこんな状態にいるのは、決して解決にはならないわ。帰って、ご両親とよく話し合ってみるべきよ。一人で帰るのがイヤだったら、涼子さん、もしわたしでよかつたら、一緒に行つてあげる。ね、だから…。

涼子 いいわよ、そんなの。その気になったら、一人で帰るわ。あなた、クリスチャンでご家庭も円満だから、わたしの気持ちなんか分かりっこないでしょ？ だけど、…どうしてそんなにまで言ってくれるの？

吉美 ほんとのこと言うとね、わたしも前に家出したことがあったの。

涼子 え、あなたが？!

吉美 ええ。中学3年の時。父に好きな人ができて、その人の家に入り浸りになって。ハハハ半狂乱のようになって、その人のところに泣き込むやら、兄はグレて母に当たり散らすやら。あの時は、まるで地獄のようだったわ。

涼子 ふーん、そうだったの。

吉美 わたし、「こんな家なんかにいるもんか。死んでやる」って飛び出して、ふらふら歩いているうちに、いつの間にか、小さいころ通っていた教会の前に来ていたの。そして牧師先生に、心の中のありったけ、みんな聞いてもらったの。それから毎週教会に通うようになって、だんだん分かってきたわ。わたしの家に何が一番欠けていたのか。

ナレーション 涼子は、いつしか、食い入るように彼女の話に聞き入っていました。

吉美 それは、“愛”だったのね。お互いに対する思いやり、本当に相手のことを考えてあげる優しさ。その代わりに、父も母も兄も、みんなが自分の正しさを主張して、相手をけなしていた。だけど、聖書を読んで、ある時、ハツとしたの。

涼子

何が？

吉美

「父が悪い、母が悪い」って責めているこのわたしは一体どうなんだって。自分こそ、愛の書けた、思い上がった人間だってことが、はっきりと見えてきて、こんな私のために身代わりに死んでくださった夫イエス様のことを思った時、「神様、^{ゆる}赦してください。信じます。どうぞわたしを変えてください」って、もう、ポロポロ泣きながら祈ったわ。——そして、今のわたしがいるわけ。

涼子

そう…。そうだったの。

吉美

すっかり変えられたわたしを見て、母が教会に行くようになって。今は二人で父のために祈っているわ。だから涼子さん、あなたが家出した気持ち、痛いほど分かるの、わたし。だけど家を出ても、問題は少しも解決しない。まずあなた自身が、本当に新しく作り変えられなければ。ね、イエス様のもとにいらっしゃいよ。涼子さん、祈るわね。

ナレーション

涼子は、自分のために心を込めて祈る友の声を聞きながら、心の中に初めて、一筋の光が差してくるような気がしていました——。